

はじめに

— コンピュータ社会の光と影 —

情報メディアセンター所長 沓掛 俊夫

情報化社会といわれて久しいが、社会のあらゆる部門でCPを始めとして、近年ではiPhoneやiPadなどの情報機器も爆発的に普及している。このような趨勢を止めることはできない。

教育現場においてもe-learningやMoodleを利用することが盛んに行われている。本号にもそれらを使った教育実践例がいくつか紹介されている。これらは大変に便利であり、有効に利用すれば、有益である。いっぽう、このような状況の中でマイナスの現象もさまざま生じている。まったく自分の頭でものを考えなくなってしまった学生が著しく増えているのも事実である。レポートは、インターネットで検索して、関連したテーマをダウンロードしてコピーしただけのもの（いわゆる「コピペ」）が激増しており、提出されたものの大部分がそのようなものである場合も少なくない。私は、それを防ぐ対策として、レポートは授業時間中に書かせるようにしている。PPを使って授業を行うと、学生はテレビを観るように見ているだけで、あとに何も残らないことが多く、やはり従来のプリント配布は欠かせない。

社会一般に眼を広げてみても、情報化は必ずしも好影響だけを与えているとは言い難い。代表的な例は地球温暖化問題である。二酸化炭素温暖化原因説は、私も含めて大多数(>95%)の地球科学の専門家は懐疑的であるにもかかわらず、大部分の人々は、それを信じて疑うこともない。その原因の一端は、コンピュータ・シミュレーションにある。大気中の二酸化炭素濃度が現在の値の2倍になったら、気温が何度上昇するかというシミュレーション結果が広く流布しており、温暖化対策の根拠ともされている。しかし、地中に埋蔵されている化石燃料をすべて燃焼しても、せいぜい70ppm程度増加するだけであり、2倍になることはあり得ない。シミュレーションは、ある仮定の上に立ってつくられたモデルをもとに計算したものであり、それをまたシミュレーションで検証することはできない。あくまでも検証は事実（観測や実験）によってのみ行われる。現実とヴァーチャルの世界が混同され、半ば幻想の世界に彷徨っている現代社会の状況にも注意を向ける必要がある。

いずれにしても、一層のこと情報化が進行することは否めないが、それを有効に利用しつつも、「影」の面も常に考えておく必要がある。